

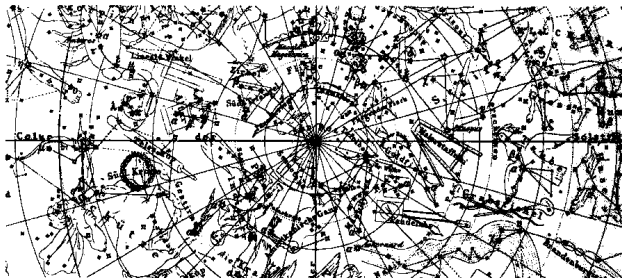
林真理子

イキナリ文庫

マリコ自身



知恵の森文庫



イキナリ文庫

マ^じリ^{しん}コ^{しん}自身
は^はや^しし^しま^まり^りこ^こ
林 真理子

1986年 8月20日 初版 1刷発行

2001年 7月25日 24刷発行

発行者—濱井武

印刷所—凸版印刷

製本所—凸版印刷

発行所—株式会社光文社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 編集部(03)5395-8149

販売部(03)5395-8113

業務部(03)5395-8125

振替 00160-3-115347

©mariko HAYASHI 1986

落丁本・乱丁本は業務部でお取替えいたします。

ISBN4-334-70399-2 Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

イキナリ文庫
マリコ自身

林 真理子



光文社

目次

第一章 マリコと女たち 7

これからは親がアクセサリーになる時代だ……………	8
このごろの家庭の主婦って、いったい何を考えてるんだか……………	15
そういう心配はヒトツマになってから考えなさいよ……………	22
あたりを見わたしても、いい男っていないわね……………	29
就職試験は「ミス・コンテスト」なのか!?……………	36
ね、この年でバレエスクールへ行くのってやっぱり無理かしら……………	43
会うたんびに姓が変わる女というのもいいものだ……………	50
あのころの私は、一人で食事をするのが少しも嫌でなかった……………	57
女同士の友情なんて、あてにならないのね……………	64
会う男性がみんな私に気があるように見える……………	71
「舌を噛み切って死んでしまいたい」ような事態……………	78

自分でもそろそろ恐ろしくなるときがある……………

84

第二章 マリコと男たち

91

男のコンプレックスは、女のはるかに屈折している……………92

私とブランド品というのは、あまり合わない……………98

もっと着物を着るようになって、いい女になってやる……………105

ワイ談を言うようになったら、もう男と女の関係にはなれない……………111

ひたむきでもなく、素直でもない私に春は遠い……………118

私、バチがあたってもいいから、素敵な恋人がほしい……………125

ま、ハヤシさんらしいからいいですよ……………132

主役になれないからパーティ嫌いだった……………139

女もこの年齢になるとミエしくないもん……………146

こうなってくると、女のプロという感じ……………153

デイトはしたくないが、電話で話すのは楽しいというタイプ……………160

「マンション付き男」がいちばん欲しい……………167

第三章 マリコ自身 175

ミエこそ女のビタミンである……………176

奥さんとそういうことするなんて、私、信じられない……………183

上京ギャルと東京の女の子たちの差……………190

私みたいな年増の誕生日、祝ってくださらなくてもいいのに……………196

失恋でいちいち死んでいたら、私なんか何回死ななきゃいけないのよ……………203

運動オンチの私は、こうした心境がいまひとつわからない……………210

働いている女の幸せてこういうことですものね……………217

お節介のうえにしつこい性格の私……………223

原サン物語に、私たちは胸をうたれる……………230

女を三十年以上やっていると、もう怖いものはない……………237

もう、昔のハヤシさんじゃないでしょ……………244

本文イラストレーション・江口修平

第一章

マリコと女たち

これから親がアクセサリーになる時代だ

いま、朝吹登水子さんの『私の軽井沢物語』を読んでいるところだ。

戦争前、ここに避暑に来ていた上流社会の人たちの生活が優雅に描かれている。これを読んで今さらながら感心したのは、昔のお金持ちというのは、今のお金持ちとまるっきりケタが違うのだ。しかもみんな英国式のマナーと教養を身につけ、ふつうの奥さま方でも二カ国語ぐらいいはふつうに喋^{しゃべ}っていたらしい。女の人やさぞかし綺麗^{きれい}な時代だっただろう。

最近、いろいろな雑誌やテレビで「ご令嬢特集」というのをしている。大金持ちのお嬢さんというのが出て来て、愛用の外車だとか、やたら広くて豪華な自室を見せてくださるのだが、中にはえらく厚化粧のご令嬢もいたりしておもしろい。

さて、こんなことをいうと自慢めくのであるが、私は二年前から、

「必ず上流社会ブームが来る」

と予言していたのである。

みんな豊かな生活をおくるようになってきて、ブランドのバッグも時計も手に入るようになった。そこそこのマンションにも住んでいるし、海外旅行も何回も行った。そうになると、後に残るのはお金では買えないもの、家柄とか、親のステータスだ。

これは男のコたちの自慢話でもよくわかる。

少し前だったら、彼らは恋人のことをこんなふうに得意そうに言っただ。

「すっごく可愛いコなんだ」

「僕にはもったいないような美人でさあ」

ところが、この二、三年の傾向として、出身校、ならびに親の職業をずらずら並べたてる例が多い。

「あそこの女子大を出てるんだぜ。もちろん小学校からの付属。父親はさあ、杉並の方で医院をやっさあ……」

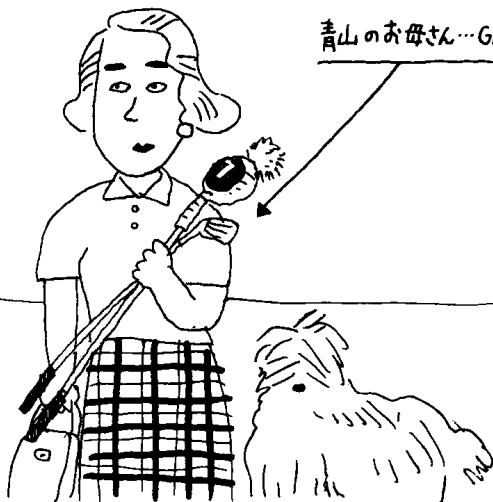
こういうテアイの話を聞くと、以前は胸がムカムカしたものであるが、この頃、自分とは全く縁もゆかりもない男なのだからと思うと、何でも聞けるようになってきた。

ちなみに、彼らの養子願望というのはかなり強くて、

「僕の夢はさ、金沢あたりの造り酒屋の娘のとこへいくことだなあ」

などと平気で言うから困ったものだ。養子でなくても、東京の女のコと結婚して、彼女の実

青山のお母さん…GANBATTÉ NE



家でちやほやされるのもいいと思う。

まあ、こんなのはほっといて、私の未来予想を続けよう。

「これからは、親がアクセサリーになる時代ね」

私はきっぱりと断言した。

「ヨーロッパへ行くのなんて珍しくもなんともないじゃない。だけどき、ママと一緒にパリへ行ったっていえばカッコいいと思うわよね」

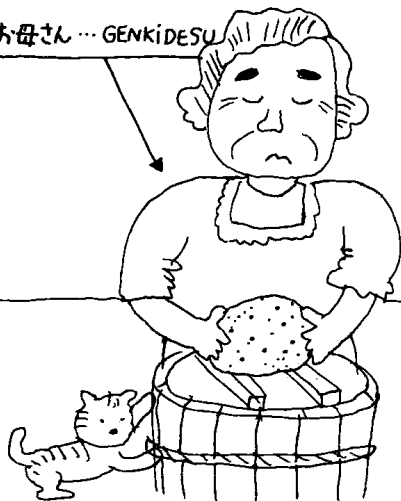
「なるほど」

友人たちは頷く。

「ママと同じものをつくるオートクチュール、ママと落ちついてランチをとれるレストランなんていうのが、これからは流行るんじゃない」

実際に青山あたりでも、そうした親子連れは

山梨のお母さん… GENKIDESU



よく目に入るようになった。ママのほうもあきらかにゴルフやけをしていて、白いポロシャツがよく似合う。姿勢がいい。

そんな二人を見ていると、やはり世の中が動いているというのがはっきりとわかる。

私ぐらいの年代まで、母親というのは「おふくろさん」のイメージである。たえずカッポウ着で、手はアカギレだらけだ。おしゃれというと、近くのスーパーで買った、あまり趣味のよくないカーディガンスタイル、旅行は婦人会のバス旅行がせいぜいだ。

「だけでもうそういうのは古いわけ。これから素敵なママと一緒に歩く時代よ」

と私が言ったら、目の前の友人がハイと手をあげた。

「それはそうかもしれないけど、もうすでに一

緒に連れて歩けないような母親を持てたらどうしたらいいの？」

私はしばらく考えて答えた。

「もう流行しようとは思わないことね」

しかし、このまま『ご令嬢ブーム』になれば、おしゃれなママというのは、かなりの必需品となる。

そのほかに、何が大切になってくるかということ、私たちは真剣に考え始めた。

「これさえあれば、お金持ち、いいところのお嬢さまだって、人に思わせるものは何だろうね」
「大きな犬なんてそうじゃない。青山近辺で、チャウチャウ犬なんて散歩させると、わ、広い庭があるんだわって感心しちゃうものね」

「あとさあ、スウェット素材のいいもの着ている人というのもさ、お金持ちって感じよね」

ファッション雑誌に勤める友人がその場に居たのだが、彼女によると、今年の秋は、ますます保守的、ますますお上品になっているという。

「もうアバンギャルドっていうのは、あんまり流行はやらないわ。やっぱり今は、いかにしてええところのお嬢さんに見えるか、それにかかっているみたい。髪型かみかただって、ふわっとした長いのが相

変わらず強いわよ」

ということであつた。

ところで、お金持ちイコール、いいところのお嬢さんという短絡的なものの考え方はいったいどこから来ているのだろうか。

私は時々、夜の六本木で派手な女子大生の一群に出くわすことがある。

みんな揃いも揃って大胆なタンクトップ。痩せているのと日にやけているのとで、そういやらしくはない。小麦色の肌に、ゴールドのアクセサリをやたらつけている。ローレックスやエルメスの時計も目立つ。

「あのコたち、どういうコたちなの」

側にいた友人に質問したら彼女たちは有名女子大のゴルフ部の女のコたちだという。みんな都内のいいところのお嬢さんだというのが、午前三時近くまで遊びまわるのを許してくれる家庭が、いいところだとは決して思えない。

朝吹さんが軽井沢ですごした頃は、お金があるということとは、それなりの見識を備えていることを意味しただろうが、今はそんな方程式はどこにもありはしない。もしかしたら、今の若い人は私が考えているよりもずっとしたたかなのかもしれない。

架空の令嬢という存在を仕立て上げて、その中で遊んでいるような気もする。

ともあれ、ふつうの女のコたちがありませんなものに向かって、背のびをするのだけはみっともない。この“ご令嬢ブーム”が、早く通りすぎてくれるといいな、と思ったりもするのだが、反面、グラビアを見るのが結構楽しくて自分でも困る。

このごろの家庭の主婦つて、いつたい何を 考えてるんだか

九月だというのに、本当に暑苦しい夜だった。

私は最近異常体質となり、原稿用紙を見るだけで軽い吐き気がする。

「こりゃきつとノイローゼよ。ほら、私ってすつごく神経質なところがあるじゃない。それでまいっちゃったのよね」

などと人に話すと、それだけ図々しければ絶対にノイローゼではないとみんな言い張る。見た目が頑強というのは本当に損だ。

ところで話がそれてしまったが、仕事をする気が全く起まつたこらない私は、ソファにもたれて雑誌を読み始めた。

じっとしていても汗が流れてくるような夜で、冷房が嫌いな私は、窓を大きく開けて風を入れた。

それでもまだ暑い。私はスカートを太ももまでまくり上げ、足をそれぞれ一人用ソファの手